



竹内緑を支えるルワンダの会

ニュースレター



No.10 (2019年5月)



**「そして、何を話すにせよ、行うにせよ、すべてを主イエスの名によって行い、イエスによって、父である神に感謝しなさい」
コロサイの信徒への手紙 3 : 17**

今年ルワンダは、大虐殺から 25 年目を迎えました。虐殺が始まった 4 月 7 日から 1 週間は、中央から地方まで全国で追悼式が開かれます。そして、午後には一般市民の参加が義務づけられた集会があり、そのため役所や商店などが一斉に閉店し、街は静寂に包まれます。4 月は、ルワンダの国中が喪に服する期間とも言えるでしょう。私たちの受益者の中には、この時期トラウマの症状によって終日床に臥している女性があります。大虐殺から四半世紀を過ぎた今も尚、少なからず苦しんでいる人があるのです。建造物や街並みが大きく変わり復興したかに見えますが、人心に与えた影響は凶り難く、当事者だけでなく次世代または何世代かに亘って負の遺産が継承されると言われます。事実、私たちの受益者たちがこのことを如実に物語っています。



ところで前回のニュースレターでは、孤児であるふたりの女兒の養家を探しているとお知らせしましたが、今回はこの姉妹と彼女たちを取り巻く人たちについて言及いたします。

そのふたりとは、現在 12 歳の姉・ジェニンと 8 歳の妹・ディビンであり、彼女たちの実母は売春婦でした。12 年前どこからカリリマへやって来て、37 歳で事故死する昨年 1 月までリリマに住んでいました。ジェニンたち母子が居住していた地域の数百メートル余り離れた所には、軍隊の駐屯地があります。そのため、この地域は小さな集落でありながら百人余りの売春婦が存在し、ジェニン姉妹の母もそのひとりでした。

母亡き後、助ける人は無くふたりだけで暮らしていたジェニンたちですが、ある日ジェニンは近くの林で燃料用の薪を集めていたところ、ひとりの兵士によってレイプされます。彼女は、直ちに役所へ駆け込み自分の身に起こったことを告げます。それから役所が介入を始めましたが、役所による支援は至極限定的でした。現政権は、大虐殺から 20 年以上過ぎた今日、孤児はいないとして孤児院を閉鎖する方針を打ち出しています。政府の真意がどこにあるのか分かりませんが、これによってジェニン姉妹が孤児院に入る、という選択肢はありません。

昨年3月、リリマの役所から ITABWEHO へ姉妹を支援して欲しいとの要請がありました。役所の担当者は、二人の背景とジェニンが HIV 陽性だと私たちに告げたのでした。

衝撃的なジェニンたちの身の上に、私は言葉を失いました。しかしながら、二人を受け入れるには私たちの実力が足りない。ジェニンのような若年の性暴力に対処する知識と経験が不足している、と私は躊躇いました。加えて、デビィンは幼く、長年に亘って保護者を必要としています。そこで私は、役所に対し二人を養育する家族を探して欲しい、その上で支援を考えると条件付きで承諾しました。しかしながら、役所が働きかけても養家は現れませんでした。

当時、姉妹が住んでいた場所の隣人たちは売春婦であり、劣悪な環境下にある女兒たちを保護することは急務でした。このまま、放置しておけばジェニンが更に傷つく可能性があるかと危惧した私は、受け入れることを決断しました。



昨年7月、ジェニン姉妹が私たちの支援センターへやって来ました。二人は栄養失調で大きなお腹をしていて、ジェニンは、憂いある表情で笑顔は少なく、典型的なトラウマの症状がありました。しかしながら、時間の経過とともに表情は和らぎ、スタッフたちや他の受益者たちとの関係も良好で、彼女は幼い受益者の面倒を良く見てくれました。

そして今年2月、ジェニン姉妹を養育する家族を探そうという話が浮上し、地域の牧師先生が幾つかの教会に話してみる、ということになりました。その会議の2週間後、私たちのスタッフであるデボタから、「養家になる」と申し出がありました。それは、晴天の霹靂でした。養家を外部へ求めたものの、内部から声が上がるとは夢想だにしないことでした。

デボタは28歳、夫アルフォンスとの間に3歳と2歳の息子二人がいます。ITABWEHOでは、会計と子供たち全般のケアを担当しています。デボタは、責任感が強く、子供たちの扱いが上手で真に適任です。

私は、デボタに養父母になるという大きな決断に至った理由を尋ねました。彼女は、「息子たち二人とも、妊娠から出産に至るまでが大変でした。そのため実子は二人までとし、息子二人と娘二人が私たちの子どもです。既に娘たちを迎える準備が整っています・・・」と冷静に語るのでした。



2週間余り遅れてアルフォンスに同じ質問をしました。彼は38歳、高校の教員で、25年前の大虐殺で両親を失っています。加えて、トラウマ(心的外傷後ストレス障害)を負っていて、数年前の4月、強い症状が出てデボタが看病するため欠勤したことがありました。

彼は、私の質問に対して答えました。「私がなぜ今生きているのか、を考えた。多くの同級生が亡くなったにも関わらず、私は生きている。家があり、食べ物があり、高給ではないが定職があり、妻子がある。なぜ生かされているのかを考えた・・・」と。

更に「私たちにとって実子も養子も同じです。良い家族になれるよう、祈って欲しい」と。

4月1日、それまで秘密裏にしていた養父母についてジェニンとデビインに打ち明けました。私は、デボタとカウンセラー、役所の担当者呼んで姉妹に言いました。

竹内：「神さまが私に、あなたたちをお世話するようにおっしゃったので、あなたたちはここへ来ました。そして、私は、神さまにお願いしました。あなたたちにパパとママを与えてくださいと。すると神さまは、あなたたちに最高のパパとママを与えてくださいました。」

すると、ジェニンの顔が一変し表情がこわばりました。

竹内：「これでいい・・・？」

ジェニン：「・・・・・・・・」

竹内：「今日、パパは家にいます。でもママをここへお呼びしました。あなたたちのママは、デボタです。」

ジェニン：「えッ！！！！・・・」

ジェニンの表情が再び変わり、デボタに抱きしめられ泣いていました。

ディビンも泣いていました。

ジェニンは、涙に咽びながら語ります。

ジェニン：「私の母は売春婦でした。そして薬物を常習していました。私たちは、センターへ来るまで人間ではありませんでした・・・」と、我々に謝辞を述べたのでした。



ジェニンたちが移り住んだ数日後、
デボタの家の玄関で

2日後、この日は9か月住んだジェニン姉妹がセンターを出て養家へ移る日です。デボタご夫妻、地域のリーダーなど関係者を呼んで、センターで小さな式典を開きました。神様への感謝と二人の人生と新しい家族への祝福を祈るものです。式典の後、私たちはデボタの家へ移動しました。

そこでは、親戚縁者、近隣の人たち30人以上がジェニン姉妹を待っていました。やがて食事



式典に集まった人たち

と飲み物が振る舞われ、ルワンダ式のお祝いが、新しい家族を喜ぶ祝宴が賑やかに始まりました。ジェニン姉妹は、彼女たちのためにこれ程のお祝いをしてもらったことは皆無でしょう。ジェニンは、泣きながら「ありがとう、ありがとう・・・」と、参加者に向かって言いました。ディビンは弾んだ声で「パパとママがいて嬉しい！」と言います。



この日は、デボタとアルフォンスご夫妻の揺るぎない決意と、娘たちへの暖かい思いやりを垣間見るような祝宴でした。

トラウマを癒す働きは、損なわれた人間の尊厳、その回復に寄与する働きでもあります。皆様のご支援に感謝申し上げます。

どうぞ、続けてお祈りとお支援をお願い致します。

2019年竹内 緑



左より、デボタ家のお手伝いさん、ディビン、カレブ（次男）を抱くデボタ、ジェニン、アルフォンス



報告と祈りの課題



- 1、 受益者の一人、18歳の女性がネフローゼと診断されて、現在治療中です。
2年余り前よりネフローゼと診断され地方の病院へ通院して、治療していましたが、3月10日全身に強いむくみが現れて緊急入院をしました。3日間の入院した後、心臓病の疑いがあるので首都・キガリの病院へ転院するよう勧められ、転院しました。首都の病院で種々の検査の結果、他の病気は否定されネフローゼと診断され、5月より治療が始まりました。
医療事情の貧しいルワンダで、治療がスムーズになされ功を奏することが出来ますように。
彼女は、現在私たちの支援により縫製を学んでいます。
- 2、 **今年も5か月が過ぎようとしています、年頭より今年の目標は、新設の ITABWEHO が NGO としての体裁を整えることにあります。**
事務所の備品などを調達する外的なこともあります、それよりも内実を整えることが優先すると考えます。内実とは、スタッフたちの給与、処遇などルワンダの法に即して整備してゆくことです。これには、時間を要しますが達成しなければならない課題です。これを成し終えることが出来ますように。
- 3、 今年の一時的帰国を、9月の中旬頃から11月の中旬までと考えています。
帰国のための良い準備ができることと、日本滞在中が有意義な時間となりますように。
- 4、 今年の下半期の活動費が満たされますように。
- 5、 昨年は国際ソロプチミスト鳥取より「はまなす賞」を、今年には国際ソロプチミストよりルビー賞を頂き、5月13日、その賞金と賞品が授与されました。

以上、感謝と共に祈り下さるようお願い致します。





- N GO の名称は、ルワンダ語で ITABWEHO (イタバホ)、この意味は「愛すること、世話すること、癒すこと」などであり、字義通り私たちが行っていることです。右図が、このシンボルマークです。私たちの働きの特徴は、以下の通りです。

- 1 心の傷を癒すために心理学（精神）的だけでなく、全人的なアプローチを行う。つまり、心理的、肉体的、社会的、霊的な支援を行う。
- 2 心に傷を負った女性だけでなく、彼女の家族（子どもたち）をも含めて支援を行う。
- 3 必要な人には、シェルターを提供し、我々の保護下で生活を共にしてケアを行う。
- 4 支援する受益者は、ひとり一人を大切にするため 30 人余りの少人数とする。以上は、我々独自のものであり、理念とも言える基本的考え方です。



🍀 ご支援・ご協力のお願い

会費及び寄付金のお願い

「竹内緑を支えるルワンダの会」の活動にご賛同くださる方は、是非ご支援とご協力を頂きますようお願い致します。

年会費（会計年度 1 月 1 日～12 月 31 日）

- 会 員 一口 5,000 円
- 賛助会員 一口 2,000 円

※会費以外の寄付も随時お受けいたします。

会費・ご寄付の送金方法

○郵便振込

（別紙払込取扱票又は郵便局備付けの払込取扱票をご利用ください。）

郵便振替口座：01330-5-102074

加入者：竹内緑を支えるルワンダの会

○郵貯銀行振込

郵貯銀行口座 記号 15250 番号 3593801



ご連絡・お問い合わせ先：「竹内緑を支えるルワンダの会」事務局
〒680-0463 鳥取県八頭郡八頭町宮谷 224-1
日本キリスト教団八頭教会内
電話 0858-72-0075
E-mail: mtakeuchi.rwanda@yahoo.co.jp
(竹内緑個人アドレス)

